

2020.6
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

6号

第42巻
No.371



ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb. (バラ科 *Rosaceae*)

生薬 エイジツ(営実) 秋、果実が紅熟する手前で収穫し、陽乾する。

成分 フラボノイド: quercetin-glucorhamnoside, kaempferol-glucorhamnoside, multinoside A,B multiflorin A,B, quercitrin, afzelin, methyl gallate、カロチノイド: lycopin、トリテルペノイド: tormentic acid、脂肪酸など。

効能 利尿、瀉下剤として腎炎、浮腫、尿不利、脚気、リウマチ、便秘に煎じて服用する。その他おでき、にきび、腫物に患部を煎液で洗う。

生薬 エイジツ (営実)

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



日本各地、朝鮮半島、中国に自生する落葉性の小低木で、海岸や河岸を好んで生息します。茎はよく分枝し、直立または斜上し、高さ約2mほどになり、鋭い刺が散在します。葉は互生、奇数羽状複葉で、普通3対、小葉は倒卵形で長さ2-5cm、鈍鋸齒縁で先端は尖ります。5-6月に円錐花序を頂生し、径2cmほどで香りが強く白色の小花を多数咲かせます。種小名の *multiflora* は多くの花を意味しています。この多花性を活かし、1862年に日本からフランスへ渡ったノイバラと中国産のコウシンバラ (*R. chinensis*) の交配種ポリアンサ (たくさんの花) 系と呼ばれる四季咲き木立性の品種「パケレット」が作出されています。また、丈夫な性質から種々のバラの台木としても重宝されています。秋に6-9mm、球形の偽果を多数紅熟します。近縁種に本州以南、朝鮮、台湾、中国に生息するテリハノイバラ (*R. wichuraiana*) があります。

中国では古来火星のことを「熒惑」または「營惑」と称しています。李時珍 (1518-1593) は「其子、成簇而生、如營星。然故、謂之實」と言い、『国訳本草綱目』(1929) において「その子は簇^{むら}って生える状態が營星さながらだ。故に營實といふ」と訳され、赤く熟した果実を赤く輝く火星に例えて「營星の実」、「營実」とした根拠にしています。しかし、一つの星では「簇^{むら}って生える」つまり果実が群がっている状態の説明になっていないことから、「營星」は火星そのものではなく、天空の多くの星々を指しているのではともいわれています。また、李時珍は「この草は、蔓^{つた}が柔かで靡^{なや}かに牆^{かき}に依り添^そうて生える。故に牆靡^{しやうび}と名けたのだ」と言い、現在の薔薇^{ばいばい}の語源を説明しています。

日本におけるノイバラは『万葉集』(7C-8C) に「道の辺の茨^{うまら} (宇万良) の末に 這^はほ豆^{まめ}の からまる君を 別^{わか}れか行かむ」と詠まれ、「うまら」はノイバラの古語であろうと推測されています。平安時代の本草書『本草和名』(918) には「營実 和名宇波良乃美」、『倭名類聚抄』(915-927) にも「營実 和名無波良乃美、薔薇子也」、『多識編』(1612) に「牆靡 波波良」とあり、「うまら」、「うはら」、「むはら」、「ははら」は同一のもので、変化して「うばら」、「いばら」となり頭音が落とされて「ばら」になったと言われています。『用薬須知』(1726) になって「營実 野薔薇実なり」と現在の名前になりました。この頃になると盛んに俳句に詠まれ、「路たえて 香にせまり咲く いばらかな」(蕪村1716-1783) や「鬼茨も 花咲にけり 咲にけり」(一茶1763-1828) など多くの句が残されています。『本草綱目啓蒙』(1803) には「營実牆靡」の項に「營実^{うまら}は実の名 牆靡^{かき}は苗の名。今薔薇と名く。その家に栽えて花を賞する薔薇は葉に入れず。薬用のものは野薔薇^{のいばら}なり。故に『本経逢言』(1695) に薔薇は乃野生白花者と云う。山野に甚だ多し。木本にして高さ五六尺に過ぎ、枝條繁延し、枝に刺多し。春、新葉を生ず。大葉、小葉の二種あり。一種葉大なるものは薔薇葉に似て小さく、薄くして光なく、鋸齒あり、互生す。四月、枝梢ごとに花を開き、簇^{むら}をなすこと数寸。其の花大さ錢の如し」とまた、「花後、実を結ぶ。穂ごとに数十百顆、落霜^{らくしやう}紅 (*Ilex serrata*) の子の如くにして微く長し。秋後紅熟して観るべし。春に至り仍^{しやう}あり。これ營実なり」と詳しい解説がなされています。

(村上守一 記)